
想いを星にのせて

秋野 功成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想いを星にのせて

【Nコード】

N9845J

【作者名】

秋野 功成

【あらすじ】

人間とは儚いものだと思え止められないアリス。彼女は魔理沙が死んで五十年経っても立ち直れなかった。彼女はあることから『魔理沙』と出会うが、その魔理沙はアリスが知る魔理沙とは違った…。

※二次創作の上、百合表現多数予定です。

一話 『弱くなった』

幻想郷。

ここには現実の世界からも忘れ去られた存在——すなわち『幻想』が存在する場所。

妖怪がいて、亡霊もいて、吸血鬼などもいる。

しかしそこにいる人間は、彼らに比べて圧倒的に生きる時間が短いのである。

幻想郷にある大きな森には、寂れてしまった家が一つ。

そこはこじんまりとしているが洋風の造りで、森に建てられていることに違和感を感じる家であった。

しかし、家主がいなくなつてから五十年経つたこの家は、所々に腐食が見え、徐々にはあるが森と一体化し始めていた。

「：ここにくるのも、久々ね」

そう呟いた彼女の手には、きれいに束ねられた菊の花があった。

菊は逝ってしまった人への手向け。つまり彼女はその寂れてしまった家の家主に、五十年経つた今でも手向け花を供えている。

否、彼女にとっては“まだ五十年”なのかもしれない。

彼女——アリス・マーガトロイドは妖怪で、人間とは違う圧倒的な寿命を持っている。故に彼女は人間と一緒に暮らすことは出来ない。

しかし幻想郷に来て、同じ魔法使いの霧雨魔理沙きりさめ まりさと出会い、恋をして、その長すぎる時間のなかで至極短い時間を、幸せに過ごせた。その短い時間から、五十年経つた今、アリスは改めて魔理沙の家に訪れていた。

「少し、古くなつてしまったわね」

外観だけ少し遠くから眺めて、玄関前に菊の花を供える。

ただし、家には入らないことにしている。老朽化してるのもある

が、何より思い出が多すぎた。

今でもアリスの記憶には鮮明によみがえる魔理沙との思い出。彼女がつくってあげた服も、人形も、大切なものも、全部魔理沙の家にはあった。

アリスは家の前で座り込み、軽く目をつぶった。

魔理沙の声が聞こえた。もちろん、記憶による幻聴だってことはわかっている。それでもハツつとなってしまい、目を開けてしまう。目に入るのは、古くなった家の玄関だけ。

「…何やってんだろ私」

アリスは人間というものを捨て、妖怪になり長寿を手に入れた。その際に人間の過去をも捨てている。だから過去を捨てるのは難しいことではないはず。

しかし、どうしても捨てきれない。生きてきた中では、それこそ一瞬かと思えた時間が唯一捨てられない。

「もう、五十年も経ったのよ。何のためにこんな家に来なくちゃ…」
ならないのよ、とまでは言い切れなかった。不意にこみ上げた涙が声より先に出たせいだ。

「…魔理沙…まりさあ」

五十年経っても、アリスは魔理沙を忘れることが出来なかった。涙が止まらない。みつともないとわかってながらも、大声で泣いた。

それでも、魔理沙の死から立ち直れたほうだった。

魔理沙が死んだ直後は、涙が枯れるまで泣いていた。季節が変わり、ようやく気が静まると、今度は魔理沙のいない生活に戸惑い、魔理沙の家に来るたび思い出して泣いてしまうという繰り返しだった。

周囲からはいろいろな慰めや同情をされた。だが、それでもアリスは自分自身にけじめがつけられなかった。
弱くなった、とアリスは思った。

魔法使いである以上、悲しんで魔法の勉強に現を抜かすということとはやってはいけないこと。

魔理沙が死んだ三年後、パチュリーが言った。

「あなたがその程度の魔法使いなら、いつそ人間のように腐れ死んでしまえばいいのに」

厳しい言葉だった。

パチュリーも魔理沙を好きだった。それを死なせたアリスを恨めしいと思うことによる言葉でもあった。

しかし、パチュリーはそれ以上にアリスが悲しみ続けるのを見なくなかった。

アリスもパチュリーの気持ち理解できないわけじゃなかった。でも、強くなれない。

ならいつそ死んでやろうか。そしたら、誰にも迷惑かけず魔理沙のところへ行ける。

そう思ったが、死ねなかった。どうしても、自殺が出来なかった。「なんで…なんでよ。私は魔理沙のところへ行きたいだけなのに！」愛する人を忘れられず、死ぬことも出来ず、何も出来ないまま、五十年という月日が過ぎてしまっていた。

アリスは魔理沙の家の前で供養を済ませたあと、自分の家に戻っていた。

さきほどの泣き顔の跡はまったく無い。

むしろ、感情の消えた、人形のような顔だった。

「あら…？」

部屋に入って、アリスは違和感に気づく。部屋に満ちていた魔力がゆがんでいた。

ゆがむということは、何かしらの魔術がどこされたか、『空間そのもの』がゆがんでいるということ。

アリスが見る限りでは、魔術がかけられた様子はない。ということとは、空間または、空間同士をつなぐ境界自体を操ることの出来る

妖怪…つまり

「紫さん…でしたっけ？」
ゆかり

ため息を吐きつつ、アリスはその人物の名前を問う。

「あちゃあ、バレたかー」

陽気な言葉を発したのは、境界を操る程度の能力を持つ、『八雲
やくも
紫』。

部屋の隅に横一線の線が入ると、その線が開き、紫が声と共に姿を現す。

境界から彼女の体をすべて出すと、その境界は線となり、線そのものも消えた。

「何の用かしら、私は客を好まないんだけど」

人形のような無表情と同じ、感情の無い声でアリスは言った。

「あらー、つれないわね。私はあなたにプレゼントしようと思ったのに」

「残念だけど、私はプレゼントをもらわない主義なのよ。恩を受けるなんてまっぴら——」

「それが、魔理沙に関係するものでも？」

「!？」

アリスの無表情が驚いた顔に変わる。

瞬間、紫の周囲をアリスの部屋の人形が囲んだ。

「…教えなさい」

小さい怒気を含むアリスの声。そこに先ほどの無感情さは無かった。

「物騒ねえ。人に物を頼むときはもっと穏便でなくてはいけないわよ？」

「あなたの能力で逃げられてしまうと厄介なのよ」

紫には境界を操る能力がある。だがアリスなら境界に逃げられる前に紫を人形で串刺しにすることはできた。

むろん、紫の近くに人形がいる場合に限るが。

「あら、逃げるつもりは無いわよ。それに、このままでは話すら成

立しない」

「…そうね」

アリスは紫の周囲を囲んでいた人形達をいつもの場所へ陳列させる。ただひとつ、紫の背後に残るのを除いて。

「なあに？そんなに信用できないのかしら」

「私はこの五十年で弱くなったのよ。警戒くらいさせて欲しいわね」
「…ふうん、別にいいわ。じゃあ、この写真を見てちょうだい」

紫は腰の部分にあったポケットから一枚の写真を取り出した。アリスは他の人形を使い、その写真を受け取った。

その写真には、三人の女子高生がビル郡の中を楽しそうに歩く姿。特に変な写真でもないのだが…

「…！？」

女子高生の一人が、アリスの良く見知る顔——霧雨魔理沙と似ていた。

いや、似ていたという程度ではない。付き合ったアリスだからこそ、その写真の女子の一人が生前の魔理沙そのものだと感じた。

魔理沙が知らない女の子と楽しそうに話すのは普通かもしれない。でも何故魔理沙が制服を着て、幻想卿にないビル郡のなかにいるのだろうか。

「これ…何よ？なんで、今更…」

この不思議を解けというのなら、正直断りたかった。実際、今でもこの写真の魔理沙を見るだけで涙があふれてしまいそうだった。

「今更じゃないわよ。それ、最近撮ったの」

「…え？」

最近、というのがわからない。同じ妖怪だから時間間隔がつりあわないわけじゃないが、紫は時々数年か数十年眠り続けることがある。もし五十年前を最近と言っているのなら、写真の意味もわかる。

「いつよ、いつを最近って言ってるのよ」

「そうねえ。三日前かしら」

「ふざけないでっ！」

魔理沙は死んでいる、それも五十年前だ。

その魔理沙が三日前にいたというのは冗談にもならない。

「紫、あなたはそんなに私をバカにしたいの！？ からかいにきたの！？ 気が済んだら帰ってちょうだい！」

そう強く言っ、アリスは床にひざを着く。それと共に、紫の背後にいた人形も床に倒れる。

ひざをついたアリスは写真を見つめ、泣きそうな声で呟いた。

「私だって…五十年経って…こんな写真を冗談だと笑い飛ばすほどになりたかったわよ…でもダメね、こんな写真を見るだけで、泣きそうになるのよ」

アリスはこぼれそうになる涙を袖で拭き、続ける。

「ごめんなさいね紫さん。私、こういう冗談ダメなの。弱いのも、写真のプレゼントはいただくわ。ダメね、私って」

「…」

「もう私はずっと弱いままでいいの。だから、泣かせて」

そしてアリスは写真の魔理沙をいとおしむように、その写真を胸に寄せようとした。

途端、その写真は二つに裂けた。

「…え？」

アリスには何故裂けたのかわからなかった。だが、紫が手に持っていた傘が床についていたことから、傘の先などで写真を裂いたのだと気づいた。

裂いた理由もわからず呆然とすると、紫がため息と共に言った。

「興が冷めたわアリス。あなたが故人に執着するのはわかるけど、人の話も聞けないほどになってしまったのかしら」

「紫さん…一体何を…」

「説明しておくけど、その写真を撮ったのは間違いなく三日前。そして、場所は外の世界よ」

幻想郷は主に博霊結界により、常人が住む『外部』と離反している。そして紫の能力によって幻想郷という土地そのものがないこと

になり、外の世界から幻想郷は知られず、幻想郷も外の世界を知るものはほとんどいない。

そして結界は強力で、その結界を通り抜けられるのは、今のところ境界を操り空間移動できる紫しかない。

「わけがわからないわ」

切り裂かれた写真を眺めつつ、そうつぶやくアリス。

魔理沙が生きている？五十年経っても？幻想郷でなく外の世界で？考えれば考えるほど混乱してくる。なんで、なんで。

「興味があつたら私の家に来なさい。案内してあげるわよ」

そう言い残し、再び紫は来たときと同様に、境界へと姿を消した。彼女が何処に行ったかはわからない。だがアリスにはどうでもいいことだった。

もしかしたら紫自身の家^{マヨレガ}に行つたのかもしれない、じゃあ何故アリスを連れて行かなかつたのか。

答えは簡単だった。アリスに考える時間を与える為だった。

「…ずいぶんとなめられたもんよね」

アリスにはそこまで読み透かされたことが癪だった。だが、そんな癪など正直どうでもいいことに思えた。

そして、アリスは床に落ちた真つ二つの写真を片方ずつ持つ。

「魔理沙」

運良くか、左側に写っていた魔理沙らしき女子高生の部分は切られていなかった。

アリスはその左側だけの写真をポケットにしまう。女子高生たちとビルが立ち並んでいるだけの写真は、ゴミ箱に捨てられた。

一話 『弱くなった』（後書き）

作者は遅筆です。多分あと三話分より後はまだ書いてません。

ですのでよくキリが悪いところでキル癖があります。

もし「遅くても構わないよ!」という優しい方がいたら、メッセー
ジやレビュー（褒め言葉でなくてもいいです）を下さると、執筆速
度が三倍に上がるかもしれません。

二話 『なぜ』

紫が住むというマヨヒガの近くに辿り着くと、そこでは紫の式神である九尾の狐、八雲藍やくもらんに迎え入れられた。

「アリス様ですね。紫様がお待ちしていますよ」
変わらないものだ、とアリスは思った。

魔理沙まりさが死んでから五十年、アリスは必要最低限なことでは生き物と接しなかった。半年に一度しか言語を話す生き物と接しなかった事もある。

そんな生活を送っていたアリスは、何が変わって何が変わってないかなどが良くわからなかった。

五十年前と少しも変わらない式神の藍を見て、私にもこのような長く付き合える相手がほしいな、とアリスは思った。

人間の魔理沙相手では、五十年なんて月日は長すぎるから……。魔理沙のことを思い出すと胸が苦しくなって、胸の前で拳を握るアリス。だが同時に、こんな気休めをもう何百回したことだろうとも思った。

「よく来たわね、アリス」

藍に案内され、茶の間のような所に通されると、紫が女座りで待っていた。

そんな紫を見下ろすように、アリスは立ったまま、無感情な声で言った。

「よく来たもなにも、今の私はあなたの思惑通りに動いているのでしょうか？」

「あら、気づいていたの」

紫はいつものように愛想笑いでごまかそうとする。

だが、そんな愛想笑いに付き合う余裕なんて、今のアリスには無い。

「……ふざけてないで、本題に入ってもらえるかしら」

口調に少し怒気が含まれた。

そんなアリスを見て紫は、愛想笑いの代わりにやれやれといった風にため息をついた。

「まあ、そうね。あなた相手に少し大人げなかったかしら」

「そういうことを言っているんじゃない——」

「故人をしのぶのは人として当然。あなたは妖怪でありながら人に近い存在だから、いつだってあの魔法使いを思い出してしまう」

唐突な言葉だったが、凶星であった。

急にアリスは心の底を読みすかされた気分になり、抗議しようとした言葉をぐっと飲み込んだ。

そして紫は続ける。

「その結果、己の身を滅ぼしてきた者を私は沢山見てきたわ。無論、あなたも例外ではない」

確かに、その通りだった。

魔理沙が死んで五十年。それなりに魔法の勉強はしていたが、魔法使いとして成長したかと言えばそうではない。

むしろその魔法の勉強が、時折自分自身を蝕んでいるという感覚に襲われることもあった。

「いたたまれないのよねー。どう転んでも死に急いではまっている子を見ると」

紫はそう言いながらアリスのほうをちらりと見る。

硬く閉ざした口に、力の入った握り手。おそらく、自覚していることを他人に言われ、その悔しさがこみ上げてきたのだろう。

そんなアリスを見て、紫は話を続けていいものか一瞬ためらった。予想以上に弱くなってしまったアリスをこのまま”魔理沙”のところに連れて行っていいものか。

下手をしたら、彼女は……。

「続けて頂戴」

紫の考えをさえぎるように、アリスは呟いた。

アリスの手は相変わらず握ったままだが、力はこもってなかった。

「……そうね。じゃあ早速だけど、あなたの求める場所へ行こうかしら」

どの道アリスを連れて行かなければならなかったのだ。

多少のリスクを負うとしても少しことを急いたほうが良いと考え、紫は境界^{スキマ}を使ってアリスを”外の世界”へと連れ出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9845j/>

想いを星にのせて

2011年3月4日21時02分発行